



オレゴン留学日記 (8・最終回)

早稲田大学教育学部3年・オレゴン大学へ留学

清沢 健二



今回は私の最後の留学記をお伝えしたいと思います。

留学生活の最後になる春のタームは、思い返すとあっという間に過ぎ去ってしまいました。友人学園での教育を中心に、授業や友達付き合いなど、すべてのことを精一杯こなしていました。

数日前、日本に帰国する飛行機に乗っていたとき、ふと思いついてこの留学生活の総まとめをしようと思ってきました。いろいろなことをして、いろいろなことを思ったこの留学。思い出に埋まったメモを見ると、自分がこの1年でやってきたことがいかにかけがえのない体験であって、貴重な時間であったのかを実感させられました。

今回は最後の春タームのお話と、この留学を帰国してからどう生かしていきたいかについてお話をさせていただきたいと思っています。

春タームの授業

春の授業は、教育学、アフリカ学、そしてライティングの授業を取りました。教育学の授業では、私が最も興味を持っている「子どもたちはどうやって第二言語を学習していくか」ということにつながる、教育と脳の関係について学んできました。言語に関する脳の使用領域はある程度研究されているので、その脳にどのような刺激を与えていくと言語を学習できるのか、またその効果的な教育方法は何か、というのがテーマとなってきます。私が受けた授業では、特に実際の教育現場で行っていく方法論、ストラテジーを、脳科学的観点から見てどのようなプロセスが重要かといったことを学ん

でいきました。

日本の大学の授業では、教員免許を取得する、または教員採用試験に合格するための、プラクティカルなことしか教えてくれません。しかし現場で働く教師にとっても、子どもたちの脳がどのように発達していくかといった理論を知っておくことは大切なことだと思います。

アフリカ学の授業では、現在アフリカで起こっている様々な問題を取り上げて、文化や歴史、地理的背景からそれをどのように解決していけばいいかを考察しました。私は実際にアフリカに行ってボランティアを経験してきたことがあったため、そこでの体験を400人のクラスの前で発表する機会がありました。そこでは、ボランティアをすることの「魅力」について発表しました。私はアフリカの発展における最重要ポイントは教育であると考えていて、経済復興や政治汚職の是正、HIV/AIDSやマラリアの抑制などの、すべての問題を改善していくための根本にあるものが教育の向上であると信じています。私はゆくゆくの将来、アフリカの教育事業に関わっていけるような仕事をしていけたらと考えています。

友人学園で教えていく中で、大学の授業を両立させていくのは決して簡単なことではありませんでした。しかしどうやって勉強していけばいいかというコツをつかんだのでしょう。人それぞれ違うと思いますが、私はわからないことは質問などをしてその日のうちに解決する、そしてなるべく宿題をためないように心がけました。おかげでこのタームは全部A+、Aを取ることができました。

